

権名誠

China
Birdmen

中国
鳥人の

新潮社

中国の鳥人

China
Birdmen

椎名誠

中国の鳥人
ちゆうごく　ちゆうじん



ISBN4-10-345607-8 C0093

© Makoto Shiina 1993, Printed in Japan

一九九三年七月一〇日発行

著者 椎名 誠
しゅうな まこと

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(03)三二六六―五一
編集部(03)三二六六―五四

郵便番号 一六二

振替東京四―八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

中国の鳥人■目次

中国の鳥人

7

月下の騎馬清掃団

63

思うがままの人生

89

ちくわ

115

蚊無し川

137

たどん

161

鯨女

185

スキヤキ

207

発想の瞬間
——あとかきにかえて

227

装画・挿画 沢野ひとし
装幀 新潮社装幀室

中国の鳥人

中国の鳥人



成都から昆明^{クンミン}までをつなぐ成昆鉄道は、四川、雲貴の高原を次々に越える山岳鉄道で、全長千百キロの三分の二がトンネルと鉄橋である。

中国もここまで奥地になると、乗客もほどほどになり、同じ硬席臥車でも北京や上海を出る列車の、あの恐怖的な押しあいへしあいの絶叫混雑とはすっかり様相が変わり、私の乗っている車輛も、今はもう寂しいくらいのまばらな乗客しかいなかった。

途中、蘇拉という駅で乗ってきた若い男の二人連れが、古びたラジカセを窓枠に載せ、この国の流行歌のようなものを大きな音で鳴らしていた。中国ではよくあることで、読書や考えごとをしている時など随分迷惑ではあるけれど、この国の人々と綿密な商売をしなければならぬ身としては、その手のことはもう多分に諦めを含めて、体が慣れてしまったようでもあった。

ところが、その二人組は、私が日本人らしいと知るや、持っているテープの中からここぞとばかり取り出してかけたのが日本の港町演歌というようなものであった。何度もコピーを経てきたらしいそのテープは、高音部のかすれる声で下北半島の兄弟漁師のうたや、別れの出船に手を振り泣き叫ぶ酒場の女の嘆き節を延々と聞かせてくれるのであった。

二人組は大サービスのつもりなのだろうが、大きな商談を控え、そろそろ集中して関連する資

料の再読再検討などをしておこう、と思つていた矢先だったので、これにはいささか閉口した。幸いなことに二人組は一時間ほどで子曲落という小さな駅で降りていった。ここで二十分の停車というので、気分転換のためにホームに降りた。私のようにホームに降りる客は他におらず、新たに乘つてくる客の姿もなかった。少しそのあたりを歩いてみると、永いこと座ったままでいた体の内部が、漸く元氣な脈動を取り戻したらしく、急に便意を感じた。

中国の長距離列車の便所はまだタンク溜め込み式にはなつておらず、それがために停車中の使用は禁じられている。

私は木造の粗末なつくりの駅舎に向い、便所を捜した。駅舎から少し離れた薄暗い竹林の中に赤黒いペンキ文字で「廁所」と書かれてゐる小さな建物を見つけた。石づくりのそこは駅舎よりも屋根の庇が深く低く覆いかぶさつてゐるので、中はいきなり夜のような暗さになつてゐた。中国の田舎の便所で電灯などある筈もないし、大使用の個室、しきりなどというものもない。

そのようなことにも私はすっかり慣れてゐた。中に先客は誰もおらず、しんとゐた。窓のまつたかない内部はさらに黒い夜の闇のようになってゐたが、僅かのうちに目が慣れてきたらしく、黒い闇へ四辺にひろがる壁の表面が仄かに白く浮きあがつてゐるようになつてゐた。

私は便器らしいひととき黒い穴と濡れてぬるぬるした足場を見つけ、ズボンを膝まで降ろし、素早くしゃがんだ。

にわかな便意なのでもしかすると下痢にでもなつたか、という私の懸念はあたらず、なかなか

存在感のある力強いものがすぐに排出された。おそらくこれは昨夜、簡陽の近くでたつぷり食べた琵琶肉ビバロウのなれの果てなのだろうな、などと呑気なことを考えていた。しんと静まりかえっていた便所の中に、その時微かすかにぬらびらぞらぞり、という音がしたようだった。はつきりとはわからなかったが限られた一箇所という訳ではなく、私のしゃがんでいる便所の全体でその「ぬらびらぞらぞり」という音がひっそりと幽かすかにしたような気がした。耳を澄ますと、続いて今度はもつとはつきり「ぬらりじゃらじより」とたしかに便所全体からその音が聞こえた。

そのあたりでさつきよりも大分本格的に目が慣れてきたようであった。どこからこのような音が聞こえるのだろうかとうと頭をめぐらせていると、そのへんの壁や天井や床がさつきよりもっとはつきり白く浮いているように見えた。しかもその白い壁や天井がなんだかゆつたりと波うつように動いているようにも見えた。

じよりざらじよりぞら

もりもりもらもら

と、本当に微かな音をたてて私のまわりの壁や天井や床がうごめいていた。

私は立ち上った。さつきから私の首筋に何かしずくのかたまりのようなものが間断なく落ちてくるのだ。

「なんだなんだ、いったいどうしたのだ……」

と、私は口の中だけで低く悪態をつきながらベルトを締め、滑らないように、白くぬらぬら動

く床を歩きはじめた。もう間違いなくこの便所のいたるところを何か小さくて沢山のものがぬらぬら動き回っている——ということがわかってきた。

襟元えりもとに落ちてきたものをつまんでよくよく眺め、「わあ！」と私は小さな声を出した。私は小さな蛆虫うじむしをつまんでいた。

L字型に折れ曲った入口のところで、私はこらえきれずいきなり走り出そうとして転倒した。蛆虫どもはもうその時、入口近くまで白い絨緞じゅうとんのように拵がつてきていたのだ。転倒したが私はすぐに立ち上った。手にぬらぬらしたものがこびりついている。どこかで頭を打ったようだったが、体は勝手に動いていた。

道に出て両手をはたき、倒れた時に潰し、手にこびりついている沢山の蛆虫をぬぐいとり、続いて背広とシャツを脱いだ。両手に持って狂ったようにそれをはたき、それから自分の背中や腹をそのシャツでさらに必死にはたき続けた。

駅舎の水呑み場で手を洗い、列車に再び乗りこんだとたんにいきなり動きだした。危いところであった。

中国で煌玉くわうぎよくを採掘できる場所は、天峨山脈の北、爛珠江らんしゅかう沿いの泥濘でいねい地帯に限られている。さらに煌玉を有する煌石はきわめて特殊な薬樹液漏出し掘削によってしか鉱脈を見つけることができないので技術者も少なく、採掘量はごく少量でしかない。いきおい煌玉の価値は年々高まってい

て、これがある程度まとめて輸入できたら世界の宝飾界に一大センセーションを巻き起こすことができる。

この煌玉の中でも、手に持ってくるくる回すと中の炎核が四方八方に火花を散らすのごとく乱れ輝く、という燦燦煌玉の巨大な脈帯を見つけた——と哈尼硬玉公司の沈増元君から東京の私の会社にテレックスが入った時、私はかしゃかしゃと吐き出されてくるテレックス・ペーパーを持ったまま両足を交互に激しく上げ下げし、文字通り狂喜乱舞してしまった。

中国のそのあたりで産出される可能性があると言われながら、ここ数年、実際に採石されたのは飴色に光る鰐目煌石だったり、不思議に必ずいつも瓢箪型に玉の連なっている双股虎石Ⅱ通称猫の金玉石だったりで、もう殆ど諦めかけていたところだったので、この朗報は、中国ふうにいるうと首を天壇よりも遥かに長くのばし、五万七千年の月日をじっと待っていた甲斐があったというものである。

そこで私は取る物も取りあえず、二週間程の旅行日程をこしらえて、成都からの長い列車旅についた、という訳であった。

約束通り昆明の駅には沈増元君が待っていた。

沈君は三十三歳。雲南の少数民族、怒族の出身である。同じ族の奥さんと結婚している。

沈君のテレックスの最後のところに、三人目の子供が生まれた、と記してあった。

中国はもう何年も一夫婦子供一人までという産児制限をとっているが、少数民族は三人まで許

されている。

久しぶりに見る沈君はだいぶ太っていた。丸い眼鏡の下にまばらな丸い口髭を生やしているの
で、遠くからだといつも笑っているように見える。

「まいどおおきに。貴様は大変お元気でしたか」

沈君は二人の日本人から日本語を教えてもらったそうだが、一人はどうやら関西商人らしく、
もう一人は老人の合気道の先生だったらしい。だから言うことがときおり変な具合になる。

「元気でしたよ。沈君の子供は元気ですか」

「おおきにおおきに、子供大きくなりました。貴様の子供はどれほど大きくなりましたか。一メ
ートル大きくなりましたか。えらいごつつうなりましたか？」

「はいはい」

私は笑って頷いた。

相変わらず私のことを「貴様」と言うのが少々困る。漢字の国だから、何度言ってもそれが最上
の敬語だと思っているからなかなかこの誤用が直らない。最近は何面倒なのでそのままにしている。
昆明からは沈君の誂あつちえたトラックで異龍湖をめざしてさらに南下し、哀年山の裾野を回って黒
江哈尼族の自治県に入る。道はすべて峻峻な山岳地帯を行くのでそこまで最低三日はかかるだろ
う、という話だった。しかしそこが目的地という訳ではなく、そこで最終目的地、臥蛇がじや村からや
ってくる案内人とおちあうのだという。